

のんた

3

山口の土地改良

vol.3

Spring 2001

21世紀の食料・環境・ふるさとを考えよう!

巻頭特集

パネルディスカッション

農業の持続的発展

棚田に見るその可能性

のんたエッセイ
子どもと農山村

入選作品のご紹介

第2回 食料・環境・ふるさと

写真コンテスト

山口県地球人会議ニユース

田んぼの学校・山口

ふるさと紀行

やまぐち あらうかと 民・工芸編

農村へ行こう

とんがりぼうち豊浦



私たちのふるさととは
私たちの手で守っていこう

山口県大津郡油谷町の棚田

panel discussion

パネルディスカッション

農業の持続的発展

棚田に見るその可能性

山口県農村整備課(旧耕地課)創設70周年を記念して、平成12年7月、山口市で「農業の持続的発展」棚田に見るその可能性」をテーマにパネルディスカッション(棚田学会・山口県地球人会議主催)が開かれました。議論を前に、全国棚田百選に選ばれた油谷町の棚田地帯の見学も行われました。棚田保全の重要性を再確認し、農業の持続的発展には何が必要なのか、活発な討議が繰り広げられたパネルディスカッションの様子をご紹介します。

棚田には保水機能、地滑りから守る機能もあるのです

石井 向津具半島の棚田の美しい景観は、どうやって守られてきたのでしょうか。

藤田 向津具半島の棚田は、毛利藩の三白(米・塩・紙)政策の一環として開作されたものです。水源を全てため池に頼っているため気候に影響されますし、大型農機が入らず手間がかかる上、あせ塗りなど高度な技術が必要で、労働力不足や高齢化が影を落とし始めています。それでも維持されてきたのは、先祖からの田を守ろうという住民の強い意識があるからです。

千賀 向津具半島は土が粘土質で水田に向いていますが、急傾斜地なので地滑りが起きやすい。田が乾き、ひび割れ、雨水が粘土層にしみ込むと土が上滑りを起こしやすいのですが、それを防ぎ、水不足の克服のため常にため池や棚田に水を貯えてきた。

長年の細やかな水管理の結果、素晴らしい棚田が残ったのです。

マクドナルド 向津具には住民同士の絆がまだ強く残っていて、それがこの素晴らしい景観を残したのではないのでしょうか。今後の日本の農産村のあるべき姿のモデルになるのでは、と私は思います。

福田 向津具は楊貴妃渡米伝説が残っているように素晴らしい文化を継承しており、それがこの景観をより引き立たせているように思います。一見、レース編みのモチー



見学の様子

フのような繊細な風景ですが、ため池や水路、田んぼなどが開作され現在まで維持されてきた経緯や背景を思うと、涙ぐましいほどの感動を受け、私たちのふるさとには私たちの手で守らなければと感じました。

石井 農業や農村の多面的な機能を、私たちはどう理解して、どう行動すればよいのでしょうか。

日本には全水田面積の約8%に当たる22万haの棚田が残っています。そこに水深30センチで水を張ると、全棚田でも6億m³、黒四ダム4、5個分の水を貯えられます。この保水機能が、激しい雨が降っても土壌が侵食されにくいという棚田の特徴を引き出しています。棚田の維持管理を放棄すると、千賀さんが言われたように、ひび割れ、雨水の浸透を招き、地滑りの原因となります。棚田を守ることが国土保全にもつながるのです。

水田を維持することは豊かな生態系を保持すること

千賀 水田を保持することは、そこに存在する豊かな生態系を保持することでもあります。同じような生態系を持っているのが今、日本では非常に少なくなった河川後背地の湿原や湿地。水田は、その代替地の役割も果たしています。さらに水田は水源かん養機能ももっています。貯えられた水の半分は地下にしみ込み、地下水や河川水となって再利用されます。それに情操かん養



機能。向津具の風景を見てほっとしない人はいないはずです。

福田 文化教育面での機能も見逃せません。農業から出た言葉が文学にもよく使われます。例えば「田毎（たご）の月」。これは水田の一枚一枚に月が映る様を例えた言葉です。種の香りや蛙の音など田んぼは人間の五感に訴えてきます。こういう体験を教育に取り入れられたり、環境の良さを高齢者福祉に役立てない手はないと思います。

農業の持続的発展には何が必要なのか

石井 米が不足すれば米の輸入はできませんが、棚田や水田がもつ様々な機能は輸入できません。だからこそ農業の持続的発展が望まれるわけですが、それには何が必要なのでしょう。

福田 集落全体が意志統一を図り、手回がかかる作業、後継者問題などに取り組めば、国が掲げる食料自給率の向上にも大いに貢献するのではないのでしょうか。都市との交流も必要で、生産者は米を作るだけでなく、

◎「日本の棚田百選」

滝谷町の棚田全面積の約60%が地滑り地域に指定されている向津具半島。その地滑り地域を中心とする500haに2万枚の棚田が広がり、2千箇所以上のため池が点在しています。そんな中でも特に東後畑の棚田の風景は美しく、「日本の棚田百選」に選ばれました。



石井 進さん

農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長



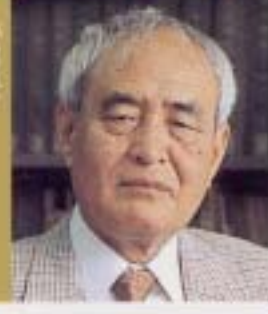
アン・マクドナルドさん

農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長



千賀 裕太郎さん

農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長



中島 峰広さん

農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長



福田 百合子さん


農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長



藤田 芳久さん

農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長
農林水産省 農産部 農産課長

ZOOM IN!
ズームイン!



油谷町の棚田
NOW ナウ

向津具の棚田地帯は、10%以上の勾配が海岸線から海拔250mまで続いています。耕作地一枚当たりの面積は狭く、耕作道も不十分で大型農機が導入できず、高齢化などが進む中で農地の荒廃が続いています。その一方で、小型機械を使うためにも「ハゼカケ」が盛んで、「ハゼカケ米」は消費者のニーズも高く、生産者も熱心に取り組んでいます。

近年は、棚田の維持管理を主体とする規模拡大に向け、用水を利用しない転作作物を栽培して牛の飼料として活用しており、棚田地帯の農業は、米づくりから肉用牛の飼育へと移行しつつあります。

また油谷町では平成11年度から転作田を利用した「棚田ボランティア」を実施。参加者は田植えや稲刈りなどに参加。好評を得ています。

経済的持続性・物質的持続性・心の持続性が不可欠です

千賀 経済的に自立できないと後継者も出てきません。市場原理を活用し、良いものを売って収入を得るようにすることです。農業農村の振興には生産基盤や生活環境の条件整備は欠かせません。農村では、心が

だれにも安らぎの場となる景観を守るため日々努力していることを、1人でも多くの消費者に知って欲しいと思います。

マクドナルド 日本人は自分の国の農業・農村をもっと評価するべきだと思います。水田は私の母国カナダにはありません。水田は、限られた資源を有効に循環利用する素晴らしいシステムであることが理解されれば、農業の持続的発展も可能なのではないでしょうか。

満足する場とお金が落ちる場にはズレが生じやすく、そこを踏まえてお金が落ちる場を作ることが必要なのは、ただし、この素晴らしい景観を崩さずに。

福田 消費者も農業を体験することが必要だと思っています。そうすれば生産者の苦労が分かると共に、農業が文化だと気付くのではないのでしょうか。文化は縮々と引き継が

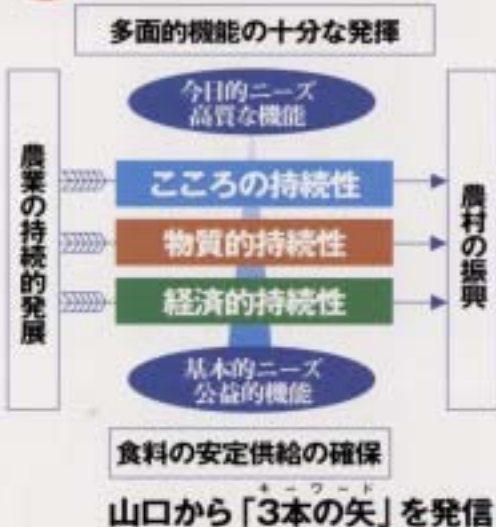
なければならぬものです。

石井 農業・農村の持続的発展には、経済的持続性・物質的持続性・心の持続性という3要素が不可欠です。そのためにはまず私たちが日本の農業を理解し、正しい評価をして、農業・農村に必要な基盤や環境づくりを後押ししていかなければならないと思います。



パネルディスカッションの様子

key word
棚田が語りかける
持続的発展のキーワード



column

棚田には
こんな役割が。

1 棚田は水のダム

雨がふると、雨は田んぼからゆつくり地下へしみこみます。だから、水が一気に川へ流れ込んだり、洪水や鉄砲水が起きるのを棚田は防いでくれるのです。

2 地滑りも防く

棚田はたくさん水をたくわえるので、土がひびかれるのを防ぎ、地滑りを起こしにくくするのでです。

3 水や空気をキレイに

棚田には、水の汚れやばい菌をフィルターとなつてとりのぞいて、水をきれいにする働きがあります。

4 生き物の宝庫

きれいな水があるところには、いろんな生き物たちがいっぱい。棚田は豊かな生態系の源です。

子どもと農山村

山口大学非常勤講師
田んぼの学校・山口 校長

佐藤 登

text by SATO Noboru

子ども

が自由に走り回れる場所が少なくなった。大人が管理する「遊び場」は自由さが少ない。子どもの世界はかなり非常識であり、突然ワーブしていくので大人からはなかなか理解しがたいものである。そしてまだ世界が混沌としているが故にあらゆる事に興味、関心をやたらに持ち、質問し続ける存在である。

この時期が子どもが自然と会話をするチャンスである。つまり石に話しかけ、返事をもらっている姿を見かけることになる。そのみずみずしい感性で様々な生き物に接してその生き方に感動したり、その場所場所の風の音、水の流れ、日光の輝き、全てがそれぞれ特有のリズムで動いている雰囲気の中で過ごしてみる時期である。

それは農山村において可能である。何故ならそこには人間の生きる原点があるからで、子どもが理解することの出来る自然があるからである。勿論そこは食料を初めてとする第一次産業の場であり、自然と調和を計りながら生産をしている環境であるので、その特徴を生かしていく。

自然

の姿は均一でない。同じものが全くないと言ってよいほど一つひとつが個性的である。形や色、大きさ、多さ、長さ、重さ、広がり、動き、成長の変化、食べられるか、遊びになるか、害になるか、などを無意識の内に取り込んでしまわれた。その蓄えは、時間をかけて徐々に発酵し、物事すべてを総合的に理解していく時に意味を持つてくる。

子どもといえども心の持ち方は様々であ

るのに対して、自然がそれなりに受け入れてくれるというのには有り難い。その子なりの世界が作られる。問題は自然との接し方を教えてくれる人が少なくなったということだ。子ども集団が作れなくなった。遊びの伝えが困難になってきたという状況は放置されてはならないだろう。

農山村

には元氣な高齢者が健在である(だろう)。係のような子どもに接することは巧みであり、昔話はしてくれ、手を使っていろいろな物を作ってみせる。どこでカブトムシを見つけたか、何が美味いか教えてくれるとなり、じゃあ泊まっていくかという様なことにならないかと想像をしている。

走り回っている子どもは、学校で学習する意味をきつと理解してくるだろう。



最優秀賞

「秋 日」 山口市嘉川
藤津一男(吉敷郡小郡町)

黄金色に輝く稲穂と赤く輝く彼岸花を舞台に舞い降りたサギ。
21世紀に残したい自然の美しさにシャッターを切りました。



山口県内の農山漁村の良さを再発見していただくとうと「水・土・人・くらし」をテーマに、平成12年9月から12月にかけて「食料・環境・ふるさと写真コンテスト」を開催しました。応募総数353点。県内各地から寄せられた農山漁村の風景や人々のくらし、伝統文化などを撮った数々の作品のうち、入賞作品22点を誌上でご紹介いたします。

食料・環境 「水・土・人・くらし」 ふるさと写真コンテスト

やまぐちの農山漁村景観を活かした
地域づくりコンクール

一般の部



優秀賞

「家路に」 阿東町徳枝
佐伯静枝(吉敷郡小郡町)
田植前の仕事を終えて家路に。



「いか干し作業」 萩市
竹内一夫(長門市)
萩市、つばきまつりで撮影したものです。

入選



「新時代の稲刈り神事」 山口市仁保
内田利夫(山口市)

山口市仁保地区のむらまち交差点で設けた交差点で行った刈取りの儀式。21世紀を迎え新しい型での儀式として、神主さんにコンパインに乗ってもらいました。



「家路へ…!!」 仙谷町川尻
山尾正美(山口市)

夕日の日当たりと影とのコントラストに注意をしながら人物を入れました。老婆の優姿が(家路へつく姿が表せたら)と思って撮影しました。



「お手伝い」 山口市仁保
内山英治(徳山市)

コブやまぐちの新農業米の田植えの日を撮りました。

佳作



「梅雨の晴れ間に」 萩市
吉田健次(山口市)

梅雨の晴れ間にイリコ干しの作業が丁寧に行われていました。山口の特産品も幾人もの手によって育てられており、伝統の味の大切さを再確認しました。



「大地を耕す」 七つ浜村
梅田正一(新南陽市)

美しい田の大地の横まさですが、トラクターでキレイに土地が耕起されるのを見て感動しました。



「美しい豊穡」 須賀町須賀
輪田重樹(山口市)

私の前を通った時、うっすらと汗をかき、のら仕事をして清々しい顔の美しい農婦だった。



「川と共に生きる」 萩市川島
松本照夫(萩市)

自分の家の前の小さな庭川は生活には欠かせない。履も放浪されているきれいな川。野菜を洗って市場に出荷準備。ゆたさもひとしほ。



「十尺」 宇部市小野 山根英雄(山口市)

晩秋の峠路に、二本の十尺が静寂に佇んでいたのが印象的。



「憩いの時」 徳地町八坂
河村醇(佐波郡徳地町)

農業者年齢は年々高齢化してきている。仲の良い老夫婦が農作業の途中、しばしの休息をとっているなごやかなところを狙った。



「野道を行く閑児たち」 萩川町
三船光(下関市)

合戦放棄の為、今年の子供達があぜ道を通りました。子供達の話し声、カラフルな服装が水面に映り、ひととき水田が華やかのように感じました。



「せせらぎ」 山口市宮野
山下景子(山口市)

収穫の終わった田んぼの側には彼岸花が咲き乱れスキも顔をのぞかせ、小川には水が流れている。春になったらメダカもスイスイと泳ぐであろう。そんな風景を21世紀になっても残していきたい。



「梨花授粉風景」 香川町 藤永照美(下関市)
(コメントなし)



「2年に一度の年番神楽」 山口市
吉田好典(玖珂郡山宇町)

奮闘したかわいい子供達の舞いに見とれている村人達。のどかな村祭の様子が印象的であった。



「出漁」 宇部市 神田正治(宇部市)

船団を頼んで漁に出かける勇壮なさまに感動し、撮影しました。



「収穫を迎えて」 須賀町 清原雪江(長門市)

動機を終えて夕方より仕事のような。穂田の刈入れが夕方から始まる。上から拝見すると中々印象深い、みるみる内に稲が美しく刈に整えてくる。

最優秀賞



「ずらり整列」 阿知須町
石井亜衣(宇部市・中学1年)

阿知須の名物、寒づけ用の大根干しが始まったと聞いて、ずらりと並んで干してある大根を撮影しました。作業中の人がいなかったのが残念でした。

食料・環境 「水・土・人・くらし」
ふるさと写真コンテスト

優秀賞



「親子仲良く」 下松市
小林孝明(下松市・中学1年)

コンバインの刈り残しの稲の手作業を撮ってみました。父と娘です!

児童・生徒の部



「無題」 阿市町
河野悦海(美祿市・小学1年)

ちょうもんきょうで、ハイキングをしたときにとりを見つけました。やせいのとりをはじめたので、しゃしんをとりました。



「実りのいなほとひがん花」 豊田町
石井友唯(宇部市・小学5年)

なしがりに行ったときと中でいなかり中のひがんばなのきれいな田んぼを見つけたので、写真を撮りました。

主催/ やまぐちの農山漁村景観を活かした地域づくりコンクール実行委員会(山口県、山口県土地改良事業団体連合会、山口県新むらづくり運動推進協議会、食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議)

後援/ 中国新聞、山口新聞

協賛/ 富士写真フィルム株式会社

山田 口んぼの学校 開校！

のびのび遊びながら農業と自然を学ぼう



田んぼや水路、里山などを遊び場として活用することから農業への理解を深めていこう、と平成12年7月、県内初の「田んぼの学校」が山口市仁保に開校しました。田んぼでの泥んこ体験をワクワク楽しんだ子どもたち大人たち、田んぼの学校の1年間を振り返ります。

子どもも大人も
田んぼで遊びながら、
農業への理解と
豊かな感性を育てていこう

かつて子どもたちにとって、もっと身近な存在だった田んぼ。山口県でも都市化が進む中で、子どもたちが田んぼや里山などの自然と触れあう機会は、年々少なくなりつつあります。

そんな中、自然農村環境の重要な要素である水田・水路・里山などを遊び場として活用することで、農業農村整備事業で整備した農地と土地改良施設への理解を深めてもらい、環境に対する豊かな感性と見識を育てていこうと、今、社団法人農村環境整備センター内「田んぼの学校」支援センター等が中心となって、全国各地で「田んぼの学校」の設置を進めています。

田んぼの学校・山口（校長／佐藤登・元山口大学教育学部教授・山口県地球人会議委員）の開校には、山口市仁保の農家の方たちやJA仁保支所職員、大学教授などたくさんの方たちが協力、有機米づくりに利用されていた水津さん所有の休耕田を活用して開校となりました。

school
1

spring

田んぼの学校・山口の開校日には、市内外から約80人の子どもたち大人たちが集まり、水の張られた田んぼに、メダカ1200匹とドジョウ600匹を放流しました。ドジョウを見るのも触るのも初めてという子どもたちがほとんどで、ヌルヌルした手触りに大はしゃぎ。大人たちに「ドジョウやメダカは何を食べるの?」と質問するなど興味津々で、遊びながら楽しく学んでいました。

●7月22日(土)

有機米の休耕田に
メダカとドジョウを放流して、
さあ開校!

ズブズブからだが
沈んじゃいそうだよ~!



あれ~っ?
メダカもドジョウも、
なんだか数が
すっごく増えてるよ!



school
2

●8月27日(日)

生き物いっぱいの田んぼは、
健康な田んぼの証です!

開校1ヶ月後の8月27日、放流したメダカとドジョウの観察会が開催されました。子どもたちも大人たちも裸足になって田んぼの中へ。以前は有機米づくりが行われていた田んぼだけあって、メダカもドジョウもスクスク成長。その数が放流時の約10倍に増えていることを知って、子どもたちはびっくりした様子でした。ほかに1ヶ月の間に色々な昆虫が棲みついていたり植物も自生していたりして、春の田んぼとはひと味異なる田んぼの自然を、たっふりと満喫した夏の一日でした。
楽しく学んでいました。



子どもも大人も
田んぼで遊びながら、
農業への理解と
豊かな感性を育てていこう



summer





田んぼの学校って？

田んぼや水路、ため池、里山などを遊びと学びの場として活用する環境教育です。

農業農村の多面的機能を活用して、環境に対する豊かな感性と見識を持つ人を育てます。

1. 農業農村整備事業で整備した農地と土地改良施設への理解を深めよう。
2. 環境に対する豊かな感性と見識を持つ人を育てよう。
3. のびのび遊んで自然と生活に触れ子どもたちの感性を育もう。
4. 大人たちは子どもと共に遊び、学んで、自然への感性を取り戻して農業を理解しよう。
5. 農家の人はむらの生活に誇りをもち、農業やむらのこれからを考えよう。
6. 都市と農村の共生のみちを探ろう。



お問い合わせ

田んぼの学校・山口 事務局
TEL・FAX 083-932-7072

school
3



●11月11日(土)
無農薬米のおにぎりって
おいしいね!

3回目の秋の観察会には、県内各地から約100名以上の参加者が集まりました。子どもたちは水田に膝までつかってメダカをすくったり、泥んこ遊びをしたりして自然の中での遊びを楽しんでいました。また、地元農家の方々に協力していただき、無農薬米でおにぎりをつくって食べるなどして、のどかな秋の一日、生産者と消費者が一緒にあっておいしい自然を満喫しました。

秋って
おいしい季節なんだね



autumn



田んぼの学校・山口
校長 佐藤 登

来年度は定期的な観察会を行って田んぼやその周辺の自然の1年の移り変わりをじっくり味わってもらおうと思っています。小さい頃から自然や農業と触れ合う機会をもつことは大切です。今まで農業と接点のなかった若いお父さんお母さんも食べ物の大切さは本能的に感じていて、チャンスがあれば食の基本となる農業と接点を持ちたいと思っています。その機会をできるだけ多く作っていきたくので、下関市や小郡町、徳山市などにも順次田んぼの学校を開設していく予定です。泥山の感動や驚きと出会い、様々なことを学んでいってもらえるよう、無理せず長続きするようにやっていきたいですね。



柳井市

金魚ちょうちん

Kingyochouchin

愛

婚のあるユーモラスな姿でおなじみの金魚ちょうちん。幕末の頃、柳井の伝統織物「柳井編」の職人たちが、青森のねぶたにヒントを得て作り始めたものといわれています。かつてはそれぞれの家で大人たちがつくって子どもに与えていたといいますが、現在の金魚ちょうちんは、大島町の上領芳宏氏が、柳井の郷土民芸品として古来の指導を受けたものに独自の技法を加えて完成させたものです。

Yamaguchi a la carte

② やまぐちの民芸品

ふるさと紀行

やまぐち あ・ら・かると

山口県には昔から伝わるさまざまな民芸品・工芸品があります。それぞれの風土の中で育まれてきた民芸品の起源やいわれをご紹介します。

見島の鬼揚子

Miyajima no Oniyokozi

萩市

鬼

揚子は萩沖の離島見島で代々伝えられてきた大凧です。その大きさは畳3枚から6枚にもなるほどで、風にのってゆうゆうと大空を舞う姿は迫力満点です。鬼揚子の起源は8世紀頃、大陸との貿易が盛んだったころに伝わったものではないかといわれています。見島では長男が生まれると、その年の暮れに親類縁者が集まって子どもを健やかな成長を願って鬼揚子をつくる習わしが昔から受け継がれてきました。作った鬼揚子は正月に掲げ、天高く上がれば上がるほど、その子が出世するといわれています。また、鬼揚子は玄関や入り口にある厄除に、お店があれば商売繁昌を招くといわれ、おめでたいものとして小型のものもつくられています。

微

妙な濃淡が出せる墨色の良さ。繊細な細工。赤みを帯びた紫の美しい石色。

様々な優れた特徴をもつ赤間硯は、硯としては日本で最初に「伝統的工芸品」の指定を受けた硯であり、その歴史は中世まで遡ります。赤間硯は元々、門司で採れる石を使って赤間ヶ関で作られていましたが、江戸時代になって他国への石の持ち出しが禁じられたため、山陽町の紫金石を使って作られるようになりました。現在は楠木町と山陽町で採石される赤間石が用いられています。

赤間硯は一つひとつが手作り。適当な大きさにした原石を、まず円盤で平らにし、大のみやコンプレッサなどで粗彫りをした後、のみを使って彫りを施し、最後に研摩などをして仕上げます。



赤間硯

Akumansuzuri

楠町・下関市



和紙

Washi

徳地町・鹿野町など

山

山口県における手漉き和紙の歴史は古く、平安時代の「延喜式」にも周防・長門もともに紙の上納国として記されています。大内氏の時代に入ると紙の需要が増大されにつれて紙づくりが盛んに、さらに江戸時代になると毛利藩の三百政策「米・塩・紙」で奨励されたことから、和紙づくりは山代地方（玖珂郡北部）や徳地町などを中心に一層盛んになりました。明治に入っても山口県の製紙量は一時全国一位を誇ったほどでしたが、機械製紙の登場で生産者は激減。そんな中、徳地町や鹿野町などでは今も和紙づくりが受け継がれています。

和紙はコウゾ・ミツマタなどが原料。蒸してから皮を剥ぎ、川の水でさらした後、繊維が細くなるまで叩きます。漉き舟に入れて紙を漉き、乾燥させて仕上げます。



農村へ行こう!

都市と農漁村の交流施設

とんがりぼうし豊浦

そばの栽培からそば打ちまで体験できる
そばづくり講座をはじめ、加工教室、ファミリー農園、
観光農園など楽しいイベントがもりだくさん。
新鮮な農産物や鮮魚など旬の幸がいっぱい
の
青空市場も消費者に大人気。
豊浦町川棚の「とんがりぼうし豊浦」をご紹介します!

青空市場

豊浦産の新鮮な農産物・鮮魚・
加工品がズラリ!



「とんがりぼうし豊浦」は、地域農業の担
い手となる子どもたちに農業体験の場を提
供するとともに、地域の特性をいかした都
市と農漁村の交流事業を進めていこうと、
農林水産省の助成を受けて平成2年に豊浦
町が建設した都市と農村の交流施設です。
運営しているのは、第3セクターの社団
法人豊浦町産業振興事業団。消費者に大人
気の青空市をはじめ、ファミリー農園、観
光農園、加工教室といった多彩な事業を展
開しています。川棚温泉の一画という絶好
のロケーションもあって、県内各地はもち
ろん、県外からの参加者やリピーターも数
多く、都市と農漁村の交流拠点として大い
に活用されています。



新鮮な農産物・鮮魚・花き・加工品など、
豊浦町自慢の海の幸・山の幸がもりだくさ
んの「青空市」。生産者がとれたてのもの
を直接もちこむだけに流通コストがかから
ず安く、新鮮でものもいい。と消費者に大
人気です。以前は土曜日・日曜日・祝日の
みの開設でしたが、今年から月曜日・火曜日・
水曜日にも野菜の販売をスタート。ぜひお
立ち寄りを!

◎土・日・祝日

・4月、10月 7時～16時30分

・11月、3月 7時30分～16時30分

◎月曜日・水曜日 8時30分～17時

ファミリー農園

自分で野菜を育てたい！
週末ファーマーに人気の貸農園

自分の田畑はないけれど、自分で野菜を育ててみたい！そんな人たちのために「とんがりぼうし豊浦」では、農家の方から農地を借りて整備し「ファミリー農園」として貸し出しています。1区画20平方メートルが年会費わずか5,000円で借りられるとあって、毎年申し込み受付開始すぐに定員いっぱいになるほどの人気。利用者は下関市など県外からの人が多く、家族ぐるみで週末ファーマーを楽しむ人たちも多いようです。

○ファミリー農園／
・契約期間 4月～翌年2月



いちご狩り いもほり

子どもたちのとびっきりの
笑顔がほしいだよ

いちご狩りやいもほりは、子どもたちに最も人気が高い農作業体験です。真っ赤に熟したいちごをおいしそうに頬ばる子。大きなお芋を振り当てて大喜ぶする子。楽しかった思い出は、土の匂いとともな大人になってもきっと心の中に鮮やかに残っていることでしょう。「とんがりぼうし豊浦」では、町内のいちご栽培農家に協力してもらい、毎年春にいちご狩りを開催、秋にはいもほりを開催しています。

○いちご狩り／4月下旬～5月上旬
○いもほり／10月中旬～11月上旬

加工教室

漬物・味噌・梅干しづくり教室から、
本格的なそばづくり教室まで

昔からそれぞれの家庭で受け継がれてきた漬物づくり、味噌づくり。そんなおふくろの味を伝えていこうと、梅干しやらっきょう、辛子漬、味噌など、季節にあわせてさまざまな加工教室が開かれ、女性たちの人気を得ています。中でも今、男女を問わず幅広い層で最も人気が高いのは「そばづくり教室」。そばの種まきから刈り取り、本格的なそば

打ちまで年5回にわたってトータルに体験できるとあって、県内各地から申し込みがあります。

○そばづくり教室／8月、11月



●近隣のおすすめスポット

リフレッシュパーク豊浦 (豊浦町川標)

・年中無休／8:30～17:00



「リフレッシュパーク豊浦」は、1年中さまざまな花々が楽しめる自然公園。四季の園バラ園などがあり、中でも春の菜の花畑。秋は100万本のコスモスが咲き乱れるワイルドフラワー園が大人気。そのほか、芝生広場、日本庭園、全長55メートルのローリースライダーなどもあり、子どもから大人まで楽しめます。

DATA

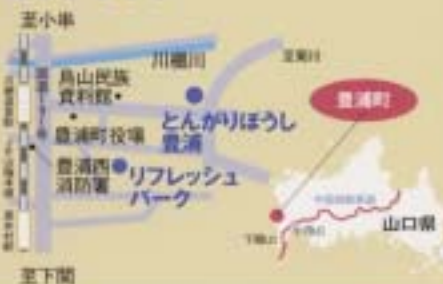


とんがりぼうし豊浦

〒759-6301 豊浦郡豊浦町大字川標5262-1
TEL 0837-74-3700 FAX 0837-74-3701
休館日／木曜日

ホームページ <http://www5.tki.ne.jp/~tongariboushi/>
○各イベントの詳細についてはお問い合わせください

ACCESS



のんたP photo column ③



それはそれは、楽しい毎日

めぐる季節

とれたての日々

青空の下、時を忘れ

泥んこになりながら戯れた緑の大地

豊かな故郷

そこは、大きな自然の学舎

萌える若草

きらめく水面

たくさん生命とともにある喜びを

いつの日も、いつまでも

発行

食料・環境・ふるさとを考える

山口県地球人会議 事務局

〒753-0079 山口県山口市系米2丁目13番35号 山口県土地改良事業団体連合会内
TEL083-933-0035 FAX083-933-0048